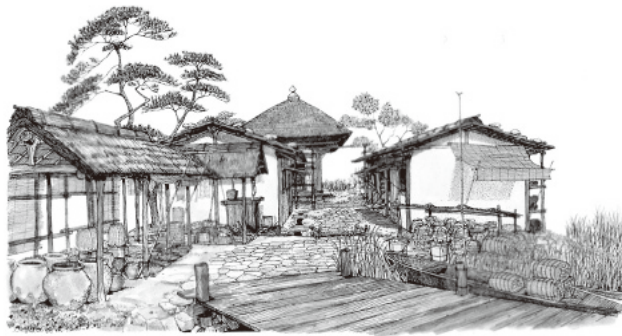


広島県立歴史博物館
研究紀要

第26号



- 資料紹介 「栗山堂餞筵詩画卷」（重要文化財「菅茶山関係資料」）の
翻刻及び訳注について…………… 吾 田 朱 里 1
 - 研究ノート 広島頼家伝来の細川家犬追物と上覧相撲の図について …… 川 邊 あさひ 27
 - 二つの「今中大学日記」の比較による両日記の性格と特色 …………… 久 下 実 37
 - 「縮景園図巻」について—十八世紀末の縮景園に係る歴史資料— ……… 白 井 比佐雄 47
 - 「縮景園記稿本」について—新発見の頼春水著「縮景園記」草稿— …… 白 井 比佐雄 85
 - 「山陽先生詩稿」訳注（三）…………… 花 本 哲 志 116
-
- クサイトツ・草出・草土—草戸千軒の呼称について— …………… 下津間 康 夫 (1)

BULLETIN
of
the Hiroshima Prefectural Museum of History

Vol.26

2024

Names of Kusado Sengen-cho Site on Historical DocumentsSHIMOZUMA Yasuo (1)

Materials introduction : Re-engrave and translation note of the handscroll

“Ritsuzandousenenshigakan”AZUTA Akari 1

A study on the illustrations of the Hosokawa clan’s Inuoumono and Sumo was

performed in front of the Shogun, inherited by the Hiroshima-Rai clanKAWABE Asahi 27

Characteristic of Two “IMANAKA-Daigaku-nikki” (IMANAKA Daigaku’s Diary)

through comparison KUGE Minoru 37

Consideration on “Shukkeien-zukan” (Shukkeien-garden illustrated handscroll)

—Historical materials related to Shukkeien at the end of the 18 century— SHIRAI Hisao 47

Consideration on “Shukkeien-ki kouhon” (manuscript of “Shukkeien-ki”)

—Newly discovered draft of Rai Syunsui’s “Shukkeien-ki” — SHIRAI Hisao 85

Sanyou-Sensei-Si-Kou;translation and annotation;part3 HANAMOTO Satoshi 116

御挨拶

広島県立歴史博物館は、中世の港町・市場町である草戸千軒町（鎌倉時代から室町時代にかけて繁栄した町）の遺跡、近世後期の備後国神辺（現在の福山市神辺町）出身の漢詩人・儒学者・教育者である菅茶山の関係資料、日本屈指の古地図資料を集めた守屋壽コレクションを中心に、広島県の歴史と文化を発信する拠点として、また、生涯学習の推進施設として、地域文化の向上に努めているところです。この研究紀要は、調査研究の成果を広く公開し、活用することを目的に刊行しています。

さて、今回の研究紀要には、重要文化財菅茶山関係資料の中から「栗山堂餞筵詩画卷」の翻刻と訳注、広島頼家に伝わる細川家の犬追物と上覧相撲の図について資料の年代を検討し頼家に伝来した経緯に関する考察、二篇の「今中大学日記」を比較することで明らかとなった特色と両者の関係性、十八世紀末の縮景園の景観を描いた『縮景園図巻』に記録された縮景園の改修内容の検証結果、縮景園の景観を描写した『縮景園記』の草稿である『縮景園記稿本』に関する資料紹介、広島頼家関係資料の中から頼山陽の漢詩草稿の訳注の取組、草戸千軒の呼称に関する一考察の七編の論考を収録しました。

あらためて、当館の調査研究活動に御支援・御協力を頂いた多くの方々に感謝の意を表し、本書が今後とも広く活用されることを念願して、発刊の御挨拶とします。

令和六年十二月

「山陽先生詩稿」 訳注 (三)

花本 哲志

- 前号では、6. 筑海行(寛政十年) 7. 醍醐行(寛政十年) 8. 誠塚行(二首)(寛政十年) 9. 書感(寛政五年) 10. 甲寅元日(寛政六年) 11. 咏梅(寛政五年) 12. 舟曉(寛政五年) 13. 舟帰広島(寛政五年) 14. 明妃(寛政五年) 15. 暑日遊照蓮寺(寛政五年) 16. 石州路上(寛政八年) 17. 瓢坂(寛政八年) 18. 夜坐(寛政八年) 19. 青楼曲(文化二年) 20. 東遊路上(寛政九年) 21. 山崎(寛政九年) 22. 美濃(寛政九年) 23. 望岳(寛政九年) 24. 題黄安仙人図(享和三年か) 25. 閨情倣陸渭(南(享和三年) 26. 雨歇(享和三年) 27. 江戸所見(寛政九年か・頼山陽全書 『詩集』は寛政六年とする) 28. 赴竹原舟中作二首(二首・文化二年) 29. 奉盈陪飲菅先生及家君席上分得眼字二十二韻(文化二年)の二十六首について訳注を行った。

- 本号では、30. 甲子樓即目(文化三年) 31. 江上二首(二首・文化三年) 32. 三月甲子樓集分得山字(文化三年) 33. 靚齋集分得相字六言律體(文化三年) 34. 以西嶺雲霞色満堂為首句賦一律壽嶺霞堂主翁八十(文化三年) 35. 丁卯孟春木村氏招飲分韻得遇(文化四年) 36. 丁卯書事(文化四年) 37. 城門失火謝龍山師(文化四年) 38. 仲春泛舟港口時羽隅君千強将之浪華得人字(文化四年) 39. 常照庵集有竹筍之供戲賦呈主人(文化四年) 40. 訪靚齋(文化四年) 41. 丁卯正月十三日集松石亭分得枝字(文化四年) 42. 春尽集松石亭(文化四年) 43. 或贈京醞名鴨川者(文

化四年) 44. 家王父廿五回忌辰家翁会寒賦請(文化四年) 45. 懷仲父大人在九州(文化四年) 46. 題黄山谷図(文化四年) 47. 午庵晚集(文化四年) 48. 問三谷達夫(文化四年) 49. 抱素堂集分得五言古体蒸韻(文化四年) 50. 題熊谷蓮生倒騎馬図(文化四年)の二十二題・二十三首について訳注を行う。

本稿の作成にあたっては、原詩の漢字は旧字体を用い、俗字・略字になっているものも正字に改め、訓読の漢字は通行の字体を用いた。訓読の送り仮名は現代仮名遣いとした。翻刻にあたっては、推敲過程がわかるように原本に忠実に表記するようにし、訓読についても修正前の原案がわかるように併記している。訳文は、修正後の本文を反映させて訳出した。訳文ならびに語釈については、前号に引き続き、谷口匡氏(京都教育大学教授)に御教示をいただいた。ここに深甚なる謝意を表したい。

30 甲子樓即目 甲子樓即目

(1)

糸肉 嘔唾 金市の南
此樓獨自類禪龕 此の楼 独自 禪龕に類る

曾無脂粉汗高興 曾て脂粉の高興を汚すこと無く
唯見瓶頭挿玉簪 唯だ見る 瓶頭に玉簪を挿すを

『頼山陽全書 詩集』卷四所収「甲子楼即目 二首」。文化三年（一八〇六）の作とされる。

【語釈】「甲子楼」太田午庵の別邸。太田午庵（一七五三〜一八〇八）は広島藩士で、名は予、字は子順、通称は権三郎、号は午庵または甲子楼、俳号を呂十という。藩の先手者頭を勤めていたが、多病のために隠退した後は風流を事とし、絵画や俳諧に優れた才能を発揮した。頼春水と親しく交遊し、『芸備孝義伝』二編の挿図を担当している。「即目」目にふれたもの。「絲肉」楽器の音色と歌声。「嘔啞」調子はずれの管弦の音。嘔啞嘲晰で「調子の狂った乱雑な音」をいう。白居易「琵琶行」に「嘔啞嘲晰 聴くを為し難し」とある。「金市」唐の都長安の西市のことで、ここでは「繁華街」の意。李白「少年行二首 其二」に「五陵の年少 金市の東」とある。「禅龕」仏堂。仏殿。「脂粉」紅とおしろい。女性の化粧。「高興」高く味わい深い趣。高趣。興趣。「玉簪」玉で美しく飾ったかんざし。玉簪（たまのかんざし）はユリ科の多年草。

【訳】

甲子楼の風物

(1)

調子外れの管弦の音と歌声が聞こえてくる繁華街の南で、この甲子楼だけが仏堂のような趣がある。花街の俗気に高尚な趣を損なわれること

なく、ただ花瓶には玉簪が生けられている。

(2)

面水背山東岸楼 水に面し山を背にす 東岸の楼
琴尊乘暮共登遊 琴尊 暮に乗じて共に登遊す
酒酣前岸生微白 酒 酣にして前岸に微かに白きを生ず
知是月輪離嶺頭 知る 是れ月輪の嶺頭を離るるを

【語釈】「尊」樽に同じ。「登遊」高い所にのぼって遊覧すること（『韓詩外伝』三）。「韓詩外伝」は中国の古代説話集。全十卷。前漢の韓嬰著。故事・逸話を、『詩経』の詩句と関連つけて解説したもの。「夫れ一奴の墻、民踰ゆる能わざれども、百奴の山、童子登遊するは、凌遲なるが故なり」とある。「月輪」月。特に満月を言う。

【訳】

川に面し、山を背に東岸に建っている甲子楼。日が暮れると山に登って琴を弾き、酒を楽しんでいる。宴も酣になった頃、手前岸の辺りがほかに白くなっているのは、満月が峰の上に出てきて光を投げかけているからだろう。

31 江上二首

江上二首

細話江樓欲徹明 細話 江楼 明に徹さんと欲し

手杯傾處膝琴横
手杯 傾く 処 膝に琴横たわる
暗知欄前曉潮至
暗に知る 欄前 曉潮の至るを
柔櫓時聞嘔軋聲
柔櫓 時に聞く 嘔軋の聲

『頼山陽全書 詩集』卷四所収「江上」。文化三年（一八〇六）の作とされる。二首とあるが、一首を欠く。

【語釈】「細話」ささやき。細々と話をする。「柔櫓」静かに櫓をこぐ。「嘔軋」きしる音。唐・李群玉の「処士の番禺の東遊より便ち蘇台の別業に帰るを送る」に「嘔軋たり 暮江の上 櫓聲揺落の心」とある。

【訳】

川のほとり二首

川沿いの高楼で静かに語り合ううちに夜が明けようとしており、杯を傾け、膝元には琴が置かれている。楼の欄干のそばまで潮を満ちてきたようだ。静かに櫓を漕ぐ、きしきしという音が聞こえてくる。

32 三月甲子樓集分得山字

三月甲子楼の集。山の字を分け得たり

屈曲南流水
屈曲す 南流の水
透迤西面山
透迤たり 西面の山

祓除占此境
祓除して 此の境を占い
觴詠解吾顔
觴詠して 吾が顔を解く
楊柳殘雨緑
楊柳 殘雨 緑にして
桃花斜日殷
桃花 斜日 殷し
恠他王逸少
恠しむ 他王逸少
俛仰淚漣漣
俛仰して 涙漣漣たるを

又

自笑唼肩聳若山
自ら笑う 吟肩 聳ゆること山の若く
一觴一詠對潺湲
一觴 一詠 潺湲に對するを
愧無新句酬新景
愧ず 新句の新景に酬ゆること無く
不出右軍咳唾間
右軍 咳唾の間に出でざるを

『頼山陽全書 詩集』卷四所収「三日。甲子樓集。分得山字」。文化三年（一八〇六）三月三日の作とされる。

【語釈】「透迤」うねうねと曲がっていること。「祓除」穢れを祓除く。「觴詠」一觴一詠。酒を飲み、詩歌をうたう。王羲之「蘭亭序」に「一觴一詠、亦た以て幽情を暢叙するに足れり」とある。「殘雨」のこりの雨。なごりの雨。「斜日」西に傾いた太陽。夕日。入り日。「殷」赤黒い色。「逸少」王羲之の字。「俛仰」うつむいたり、あおいだりすること。俯仰。「蘭亭序」に「向の欣ぶ所は、俛仰の間に、以て陳迹と為れり」とある。「漣漣」涙が流れるさま。「咳唾」せき。しわぶき。転じて長者の言葉を用いる。

【訳】

三月 甲子楼での集まり。韻字として「山」を割り当てられる

南に流れる川は屈曲し、西にはうねうねと山が連なっている。穢れを祓って土地の吉凶を占い、杯を重ね、詩を詠じれば自然と顔がほころんでくる。柳はなごりの雨を受けて緑も鮮やかに、桃の花は夕陽を受けて赤黒く染まっている。まるであの王羲之がうつむいたり仰いだりして涙をこぼしているかのようだ。

又

山のように肩をそびやかして悠々と流れる川に向き合って酒を飲み、詩を詠るのみならずから笑う。ひねり出した句はこの景色のすばらしさを表現できず、王羲之の言葉に遠く及ばないことを恥じ入るばかりである。

33 靚齋集 分得相字 六言律體

靚齋の集。

相の字を分け得たり。

六言律體

案頭一帙黄卷

案頭 一帙の黄卷

窓外千竿碧篁

窓外 千竿の碧篁

除衾鬱陶我思

除き去る 鬱陶たる我が思い

瞻來金玉其相

瞻來る 其の相を金玉にするを

文

敢願盟主人苑

敢えて願わん 文苑に盟主たるを

唯欲封侯醉郷

唯 侯に醉郷に封ぜられんと欲する

天意如知人意

天意は 人の意を知るが如く

雨晴江月揚光

雨晴れて 江月光を揚ぐ

『頼山陽全書 詩集』卷四所収「靚齋集。分得相字。六言律體」。文化三年

(一八〇六)三月三日の作とされる。靚齋の靚は静に通じ、静齋は広島藩士岡田嘉祐のこと。春水・山陽・太田午庵・坂井東派(広島藩儒・坂井虎山の父)らと親しく交遊した。

【語釈】 「案頭」机の上。「案」は机の意。「黄卷」書物のこと。昔、中国で、紙に虫が

つくのを防ぐために黄蘗(キハダ)の葉で紙を黄色に染めたところから言う。「篁」たけやぶ。「鬱陶」心がむすばれて気がふさぐこと。「金玉其相」外見が美しい意。

『詩経』大雅・棫樸に「其の章を追琢し、其の相を金玉にす」とある。ここでは岡田静齋の詩集の美しさを指すか。「醉郷」酔った気分を一種の別天地に比している。

〔如〕『頼山陽全書 詩集』では未詳とする。〔光〕『全書 詩集』では「波」に作る。

【訳】

岡田静齋の集まり。韻字として「相」を割り当てられる。六言の律

詩

机の上には一冊の書物。窓の外には千本の青々とした竹藪。鬱々とした気を除き去って、美しいその姿を見る。どうして文壇の盟主となることを願おうか。酒に酔って別天地に封ぜられたいと望むのみ。天の御心は人の心を知るかのように、気がつけば雨が上がり、川の上の月は白い光を放っている。

34 以西嶺雲霞色滿堂、為首句賦一律、壽嶺霞堂主翁八十

西嶺の雲霞、色堂に滿つるを以て首句を為り一律を賦し、
嶺霞堂主翁の八十を寿ぐ

厖眉相映若茲長
厖眉 相映じて 茲くの若く長し
堪觀彩服庭前舞
觀るに堪えたり 彩服 庭前の舞

何借青囊肘後方
何ぞ借らん 青囊肘後方
名教由來存樂地
名教 由來 樂地に存す

蓬瀛不必索仙鄉
蓬瀛 必ずしも仙郷に索めず
八句初度逢重九
八句の初度 重九に逢う

園菊山菜撲酒香
園菊 山菜 撲酒の香
〔朱批〕 結末軽々地做下。
結末軽々地として、做し下す。

是れ作家手段なり。

『頼山陽全書 詩集』卷四所収「主翁八十」。文化三年（一八〇六）九月十三日の作とされる。この日、父と景讓と共に岡田静齋を訪問している。嶺霞堂主翁は静齋の父親であろう。

【語釈】「雲霞」美しく色づいた夕焼けの雲。「厖眉」白毛まじり眉。転じて老人をいう。「彩服」きれいな衣服。色彩の美しい着物。「青囊」薬囊。後世、医術をいう。「肘後方」医書。東晋の道士葛洪（神仙道の書『抱朴子』の著者）が著した医書『肘後備急方』の略称。「名教」人のふみ行うべき道を明らかにする教え。また、儒教の教え。「樂地」楽しいところ。楽しい境地。『世説新語』德行編に樂広の言葉として

「名教の中自ずから樂地有り」とある。「仙郷」俗界を離れた所。仙界に同じ。「蓬瀛」蓬萊山と瀛洲の二仙山。東海にあつて神仙の住む所という。「逢重九」「重九」は陰曆九月九日の節供。九月の節供。重陽。『頼山陽全書 詩集』は「重九〇」とする。「園菊」庭の菊。

【訳】

西の峰の夕焼けの色が堂に満ちたことから首句が出来上がり、律詩一篇を作つて嶺霞堂主翁の八十歳を祝う

夕焼けに染まった白い眉はこんなにも長く、庭先では色鮮やかな着物を着て踊る舞いが素晴らしい。どうして薬と医書の力を借りようか。儒教の教えはもともとこの楽しい境地の中にあり、蓬萊山や瀛洲を必ずしも仙界に求める必要はない。

八十歳の誕生日はちょうど重陽の節句の日で、庭の菊を眺めながら、山菜や酒の香を楽しんでいる。

〔朱批〕 結末は軽く作っている。これは作者の腕前。

35 丁卯孟春木村氏招飲。分韻得遇

丁卯の孟春、木村氏招飲。
分韻して遇を得たり。

比稔穀賤如齊屨
比稔 穀賤きこと 齊屨の如く
天下士人舉哀顛
天下の士人 挙つて哀顛す
官糶一百廿萬斛
官糶 一ひやくにじゅうまんげく

準平原要相灌輸

準 平らかなるは原と 相い灌輸するを要す

朱頓不知德意深

朱頓 知らず 徳意の深きを

畿甸物情自恟惧

畿甸の物情 自ずから恟惧

我藩自有劉晏才

我が藩 自ずから劉晏の才有り

量為依然兩州賦

量為 依然として兩州の賦

乃知政閑心亦閑

乃ち知る 政 閑なれば心も亦た閑なるを

後圃引客斜開路

後圃 客を引き 斜めに路を開く

春寒料峭未全退

春寒 料峭として 未だ全て退かず

一痕新月在梅樹

一痕の新月 梅樹に在り

紅獸爐邊何所供

紅獸の爐邊 何の供する所ぞ

越前雪魚浪速芋

越前の雪魚 浪速の芋

〔朱批〕

握籌語氣入詩、不俗。 握籌の語氣は詩に入りて、俗ならず。

『頼山陽全書 詩集』卷四所収「丁卯孟春木村氏招飲。分韻得偶」。文化四年

(一八〇七)正月十六日の作とされる。この日、父と共に木村齋邸での詩会に赴いている。席上の作である。

木村齋(一七六八〜一八二三)は広島藩士。諱は尚誼、字は子方、通称は齋。町奉行や御騎馬弓箭頭などを歴任した後、御近習頭御用人を務めた。詩文を能くし、書にも秀でていた。文政六年(一八二三)十月六日、五十六歳で没した。

【語釈】 「比稔」「比年」と同じ。毎年。「齋屨」屨はくつ。「韓非子」難二篇に齊の景公が処刑が多かったため、「躡(義足)は貴くして屨は賤し」とある。「哀鱸」哀しそ

うに呼ぶ。「書経」召誥に「以つて天を哀籲して厥の亡を徂ひて出執す」とある。〔準平〕東西、遠近の穀物の値が均一になる。『管子』輕重丁篇に「東西の民相い被り、遠近の準平らかなり」とある。〔灌輸〕河川を利用して舟で貨物を運送する。物資が不足している地方へ送る。〔朱頓〕陶朱と猗頓。大富豪をいう。陶朱は、中国春秋時代の越王勾踐に仕えた范蠡の別名。売買事業で巨万の富を手に入れた。猗頓は、陶朱から牧畜と蓄財の方法を学び、大富豪となった。〔恟惧〕おのきおそれる。〔劉晏〕(七一五〜七八〇)唐の政治家。曹州南華(河北省)の人。代宗に仕え、塩の専売制の確立や江南から華北への物資の運輸法で利益を上げ、安史の乱後の財政再建に尽力した。〔量為〕量入為出。収入を計算して、その後に支出を決めること。国家の財政を健全に運営するための原則をいう言葉。〔兩州賦〕未詳。二つの州(安芸と備後)から税の収入を得る意か。〔閑心〕俗事から離れた閑雅な心。〔紅獸〕燃えて赤くなった獸炭。獸炭は、粉炭を練つて獸の形に作ったもの。中に香を入れて焚くのに使った。

【訳】

丁卯の年(文化四年)の一月、木村氏の宴に招かれた。

韻字を分けあつて遇韻を得た。

毎年穀物が齊の屨のように安く、天下の武士たちはみな哀しそうに叫んでいる。公儀の収益は百二十万石。穀物の値段を均等にするには、もともと不足している地方へ相互に輸送することが必要だ。大富豪たちの徳が高いということは、寡聞にして知らない。畿内の物価情勢は恐ろしいものがある。

我が広島藩には劉晏のような才覚のある人物がいて、藩の財政は依然

として兩州の賦を得ている。政治が騒がしくなければ心も静かであることを知り、裏の焔には客を引き入れるために斜めに路を付けた。春の風にはまだ寒さが感じられ、十五夜の後の月が梅の木にかかっている。赤々と獸炭が燃えている爐では、越前の鱈と浪速の芋が供されている。

〔朱批〕 商いをする時の口ぶりが詩に持ち込まれているが、俗っぽくはない。

36 丁卯書事

丁卯 事を書す

淫雨連旬水潦張

淫雨 連旬 水潦張り

宣房誰識福將殃

宣房誰か識らん 福將に殃ならんとするを

玉關符節謝西域

玉關の符節 西域を謝し

紫塞版圖通朔方

紫塞の版圖 朔方に通ず

已睹夷吾平糶價

已に睹る 夷吾 糶価を平らかにするを

還聞吉甫啓戒行

還た聞く 吉甫 戒行を啓くと

幾家閨婦遲邊報

幾家の閨婦 辺報を遅ち

唯顧不迨薇蕨剛

唯顧う 薇蕨の剛に迨ばざるを

『山陽詩鈔』卷一『頼山陽全書 詩集』卷四所収。文化四年（一八〇七）の作。

【語釈】 「淫雨」長く降り続く雨。長雨。「張」ここでは水が漲るの意で用いる。

『詩鈔』では「漲」に改めるが、これに次韻した叔父春風の詩『頼山陽全書 詩集』

収録でも第一句末字は「張」になっており。本来は「漲」が正しい。「水潦」大雨。大水。雨が降ったあとのたまりみず。「宣房」元封二年（紀元前一〇九年）、堤防が決壊したまま二十数年間放置されていた黄河沿いの東郡瓠子において、前漢の武帝は治水事業を行い、工事が終了すると堤防の上に宣房宮という建物を建てさせた。この大規模な治水事業を「宣房の治水」といい、「宣房塞がりて、万福来たる」と歌われた。「玉關」玉門関のこと。西域の玉を漢土に運ぶときに通る関。中国漢代の万里の長城の西端に置かれた関所。陽関と共に西域への要衝であった。現在の甘肅省敦煌県の西。盛唐の詩人・王之渙の「涼州詞」に「春光度らず 玉門関」の句あり。「符節」わりふ。てがた。『周礼』地官・掌節に「門関には符を用てし、賄には璽（印璽のしるし）を用てし、路には旌を用てす」とある。「紫塞」万里の長城。ここでは、この年に設置された松前奉行を指している。松前奉行は、江戸時代後期に、蝦夷地（北海道）松前に置かれた遠国奉行。ロシア船の来航に対応するため、この年（文化四年）三月に蝦夷地全域を幕府直轄領とし、それまでの箱館奉行を改称して松前奉行を新設し、定員も増やして蝦夷地支配と北辺警備にあたった。文政四年（一八二二）、蝦夷地の松前藩への返還により廃止。「版図」一国の領域。領土。「朔方」漢の武帝が匈奴を討つてオルドス（鄂爾多斯）の地に置いた郡名。ここでは蝦夷地を指す。「夷吾」管仲（？―前六四五）の名。管仲は中国春秋時代齊の政治家。公子糾（？―前六九五）の臣下で、糾と桓公との公位争いで糾が敗れたため捕虜となったが、桓公の臣下の鮑叔牙の推薦で用いられて宰相となった。以後、桓公を助けて富国強兵政策を進めた。対外的には北方の夷狄、南方の楚の侵入を撃退して中原の諸国を防衛した。ここでは択捉方面の警備のため蝦夷地に赴いた若年寄堀田正敦（一七五八―一八三二）を指している。「吉甫」尹吉甫。周の宣王の臣下で、異民族である玁狁を征伐した。「戎行」軍人の集団の行列。軍隊の

隊列。「詩稿」は「戒」を「戒」に作るが、誤りであろう。「戒」に改めて解釈する。「薇
蕨剛」『詩経』小雅・采薇に「薇を採り薇を采る。薇も亦た剛し」とあるのを踏まえ、
兵役が長びくことをいう。

【訳】

丁卯ていぼうの年の出来事を書く

十日以上降り続いた雨によって水が溢れ、漢の武帝が築いて福をもた
らすと歌われた堤防にも災異が起ころうとしている。武帝が玉門関を閉
じて西域との交易を絶ったように、幕府は長崎に来たロシアの要請を許
さず、朔方郡を置いて長城を北に延ばしたように蝦夷に迫ったロシアに
対し松前奉行を置いて版図を広げようとした。

国内では松平定信が米価の高騰を抑えて人心を落ち着かせ、北方の警
備に若年寄の堀田正敦まさあつを向かわせたと聞く。しかし、北方警備に赴いた
将士の妻たちは夫からの便りを待ちわび、冬にならぬうちに帰ってきて
欲しいと願っている。

37 城門失火。謝龍山師 城門火を失す。龍山師に謝す

炎威不及冷官居	炎威 <small>えんい</small> 及 <small>およ</small> ぼず	冷官 <small>れいかん</small> の居 <small>きよ</small>
無恙空床琴與書	恙 <small>つがな</small> 無し	空床 <small>くうしょう</small> 琴 <small>きん</small> と書 <small>しよ</small> と
多謝遠公修尺一	多謝 <small>たしや</small> す	遠公 <small>えんこう</small> の尺一 <small>せきいつ</small> を修 <small>おさ</small> め
城門炎後問池魚	城門 <small>じょうもん</small> 炎後 <small>えんご</small> 池魚 <small>ちぎよ</small> を問 <small>と</small> うを	

『頼山陽全書 詩集』卷四所収。文化四年四月二十三日の作という。同日の「梅
颯日記」には「六丁目方出火、三丁目三原や近所にて止。さんみ小路屋敷七軒斗焼
る。飛火の由」とある。

【語釈】 「龍山師」僧の名と思われるが未詳。「冷官」閑職。「遠公」東晋の高僧・
慧遠えおん(三三四〜四一六)のことだが、ここでは「龍山師」を指した呼び名か。「尺一」
書簡。手紙。明代の白話小説(口語体で書かれた中国の小説)『古今小説』卷十一
「趙伯昇茶肆遇仁宗」に、趙大官人からの手紙に感謝する趙旭の詩に「多謝す 貴
人の尺一を修むるを」とある。「城門炎後問池魚」中国宋代の説話物語集『太平広
記』卷四六六に引く『風俗通』に「城門火を失し、禍池魚に及ぶ」とあり、宋の城
門で火事が起こった時、池の水で消火したため、池の水が無くなり、魚が死んだ
とある。

【訳】

城門の火事。龍山師に感謝する。

火事の火の手は閑職にある者の家には及ばず、空っぽの寝床と琴と書
とは何事も起きていない。遠公(龍山を指す)が手紙を下さって、城門
での火事の後、池の魚のことを御心配いただいたのはとてもありがたい。

38 仲春泛舟港口。時羽隅君千強、將之浪華。得人字

仲春ちゆうしゆ 泛舟はんしゆ 港口かうこう。時羽隅君千強、將之浪華。得人字

人の字を得たり

柳眼蘆芽潤嶼春
 依稀風景似黄津
 蘭舟佗日傲遊處
 別酒無忘共故人

柳眼蘆芽 潤嶼の春
 依稀たる風景 黄津に似たり
 蘭舟 佗日 傲遊の処
 別酒 忘るる無かれ 共に故人

『頼山陽全書 詩集』卷四所収「仲春泛舟港口。時羽隅君千強、將之浪華。得人字。」文化四年（一八〇七）作。「春水日記」二月二十八日の条に「兎輩舟遊」とあり、『興樂叢書』（浅野文庫、広島市立中央図書館蔵）の「春水詩稿」に「寺川子強汎舟分得楊字」七言律詩がある。『全書 全伝 上巻』二月二十八日に「寺川庄助、大坂蔵屋敷詰餞別舟遊二、素平同伴」とあり、寺川庄助が寺川子強と思われる。「詩稿」には羽隅君千強とあるが、千強は子強の誤りであろう。寺川子強については不詳。

【語釈】「柳眼」柳の若芽。「蘆芽」蘆の芽。「依稀」はつきりしない様子。かすかなさま。ほのかなさま。「潤嶼」潤は広い、嶼はしま、小島の意で、広島を指す。広島の名は、天正十七年（一五八九）に毛利輝元が広島城築城の鉄入れの時に命名したとされる。広島市内を流れる太田川の三角州（デルタ）に点在する島の中で最も広い島を選んだことから「広島」と命名したとされる。「黄津」木津。現在の京都府木津川市。木津川の河港。「依稀」はつきりしない様子。かすかなさま。ほのかなさま。「傲遊」遊遊に同じ。さかんに遊ぶ。自在に遊ぶ。蘇軾の「前赤壁賦」に「飛仙を挾んで以て遨遊す」とある。「蘭舟」モクレンで作った舟。小舟の美称。「赤

壁賦」に「桂の櫂 蘭の槳、空明に撃ちて流光に沂る」とある。「佗日」「他日」に同じ。以前。「別酒」送別の宴。「故人」昔の友人。古くからの友だち。

【訳】

（陰曆）二月舟を入江に浮かべる。羽隅千強（寺川子強か）君がまさに大坂に赴こうとしている。「人」の韻字を得た

柳や蘆が芽吹いている広島春、ぼんやりと霞んだ景色は木津川口とよく似ている。ここでモクレンの舟に乗って盛んに遊び、送別の酒を酌み交わしたことを忘れないでほしい。お互い古くからの友人なのだから。

39 常照庵集。有竹筍之供。戯賦呈主人

常照庵の集。竹筍の供有り。
 戯れに賦して主人に呈す

君屠籜龍去
 向我腹中藏
 （朱批）善諷

君は籜竜を屠り去り
 我が腹中に向いて蔵す
 （朱批）善諷

唯恐生鱗甲
 撓撩錦繡腸

唯だ恐る 鱗甲を生じ
 錦繡の腸を撓撩したるを

【語釈】「籜龍」たけのこ。「生鱗甲」唐の陳陶の「竹十一首」其四に「鱗甲を生じて尽く竜と為るを恐る」とあるのを踏まえ、タケノコに鱗と甲羅が生じて竜に変化

することをいう。「撓療」撓も療も、乱すの意。「錦繡腸」詩文の才に富んでいること。豊かな詩情。

『頼山陽全書 詩集』卷四所収「常照庵集。有竹筍之供。戯賦呈主人。」。文化四年三月の作。

【訳】

常照庵の集まり。筍で供応された。

戯れにこの詩を詠んで主人に呈する

君は筍をさばいて、私の腹の中に収めた。(朱世)巧みな冗談。

腹中の筍が鱗や甲羅を生じて竜になり、私の詩文の才をかき乱してしまうのではないかと恐れている。

40 訪観齋

観齋を訪ぬ

有酒有琴聊可娛 酒有り 琴有り 聊か娛しむべし

蕭然吏隠一環堵 蕭然として 吏隠す 一環堵

迎賓指點階前樹 賓を迎え 指点す 階前の樹

近日倍栽五六株 近日 倍栽したる 五六の株

『頼山陽全書 詩集』卷四所収「訪静齋」。文化四年の作。「春水日記」二月五日の条に「晚過静齋、相携過岩戸」とあり。あるいはこの日の作か(「梅颯日記」には

記載なし)。

【語釈】「静齋」広島藩士岡田嘉祐のこと。33参照。「蕭然吏隠一環堵」「吏隠」は、低い官職にとどまり、俸給を受けながら隠逸すること。「環堵」は小さく狭い家のこと。「蕭然」はみすばらしくさびしいさま。陶淵明の「五柳先生伝」の「環堵蕭然」として風日を蔽わず(「風や日差しを遮ることもできないくらいみすばらしい)を踏まえる。「階前」階段の前。また、庭先。庭前。「倍栽」「倍」は「培」の誤記か。『全書 詩集』では「培」に作る。ここでは「培」の意味で解釈した。「五六株」「株」は木を数える助数詞。「五柳先生伝」の「宅辺に五柳樹有り」を踏まえる。

【訳】

静齋を訪ぬる

ここには酒が有り、琴がある。聊か楽しもうではないか。この見すばらしい小さな一軒家に藩士の身分のまま隠棲している。客を迎えて指さす庭先の樹々は、最近植えたという五六本だ。

41 丁卯正月十三日、集松石亭。分得枝字。

丁卯正月十三日、集松石亭に集う。分かれて枝の字を得たり

韶光已過十三日

韶光 已に過ぐ 十三日

花樹已開千萬枝

花樹 已に開く 千万の枝

秉燭盡歡歡未盡
還將春盡卜佳期
(朱批) 作更何若

燭しよくをまりて 歡かんをつく尽くすも 歡かん未いだだ尽くまず
還またまきまにまるまきまんとましてまるまきまをまくます
更まらまにまらまにまらまばまらま若ま

『頼山陽全書 詩集』卷四所収。文化四年一月十三日の作という。松石亭は広島藩士賀美公台の室名。賀美公台は、広島藩士で、名は通、字は公臺、通称は喜和馬。古学を修め、寛政七年(一七九五)に奥詰となり、修業堂の教授となった。梅園太嶺の没後、跡を継いで教頭となった。春水と親交があり、文化九年(一八二二)十一月二十二日に歿した。享年五十八歳(玉井源作『芸備先哲伝』廣島積善館一九二五年による)。「春水日記」に「夕 過江田及松石館」とあり、山陽も春水に同行したものと考えられる。

【語釈】「韶光」うらかな春の光。「秉燭」手に灯火を持つ。李白「春夜桃李園に宴するの序」に「古人燭を乗りて夜遊ぶ」とある。「佳期」よい時期。

【訳】

丁卯の年の正月十三日、松石亭に集まる。韻を分け合つて枝の字を得た

うらかな新春を迎え、すでに十三日が過ぎ、梅の樹の枝という枝はすでに花が開いている。灯火をともして夜も大いに楽しんだがまだ遊び足りない。今またまさに春が終わろうとして、よい時期がないか占っている。

(朱批) 「還」の字を「更」にしてみたらどうだろうか。

42 春盡。集松石亭

春しゆん盡じん。集しよく松せき石せき亭ていにまるま

還將春盡卜幽期
餞送東君幾首詩
新樹深苔微雨後
幽情更覺勝花時

還またまきまにまるまきまんとましてまるまきまをまくます
東とう君くんをせん送そうす 幾いく首しゆのし詩
新しん樹じゆ 深しん苔たい 微び雨うののち後
幽ゆう情じよう 更まらまにまらまにまらまばまらま若ま 花か時じにまるまるまをま

『頼山陽全書 詩集』卷四所収「春盡。集松石亭」。文化四年三月三十日の作。「梅廳日記」に「賀美被招御出、久権同様」とある。

【語釈】「春盡」春が終わること。春の末。「幽期」幽隠との約束。幽隠は、世を逃れ、隠れ住む人の意。ここでは承句の「東君」。中唐の詩人・賈島(七七九〜八四三)の詩「李凝の幽居に題す」の結句に「幽期 言に負かず」とある。「東君」春の神。「新樹」新緑の樹木。「微雨」小雨。中唐の詩人・韋応物(七三七〜?)の詩「幽居」に「微雨 夜来過ぐ 知らず 春草の生ずるを」とある。「幽情」高雅な心情。晋・王羲之の「蘭亭序」に「絲竹管弦の盛んなる無しと雖も、一觴一詠、亦た以て幽情を暢叙するに足る」とある。「花時」花が咲く季節、すなわち春のこと。

【訳】

春の終わり。松石亭に集まる

今まさに春が終わろうとしているなか、この隠者と今度いつ会えるかと占い、春の神の旅立ちの餞に何首の詩を贈っただろう。小雨が降った後には、新緑と苔とが青々として、この高雅な風情は花の咲く春にも勝つ

ている。

43 或贈京醞名鴨川者 或ひと京醞の鴨川と名づく者を贈る

誰釀鴨川鴨頭緑 誰か釀さん 鴨川鴨頭の緑
 釀歸千里入金杯 千里を釀歸して 金杯に入る
 釀茲輩下汪洋水 茲の輩下 汪洋の水を釀し
 澆我胸中磊塊來 我が胸中の磊塊に澆ぎ來る

『頼山陽全書 詩集』卷四所収「或贈京醞名鴨川者」文化四年の作。

【語釈】「鴨頭緑」鴨の首の毛のような緑色。李白の詩「襄陽歌」の中の二句「遙かに見る 漢水 鴨頭の緑 恰かも葡萄の初めて醞釀するに似たり」を踏まえたもの。「釀歸」持つて帰ってくる。「金杯」黄金のさかずき。「襄陽歌」にも「何ぞ如かん 月下に金壘を傾くるに」とある。「釀茲」『頼山陽全書 詩集』は「將斯」に作る。「輩下」輩れんげ（天子の乗り物）の下。天子の膝元。「汪洋」水量が豊富で、水面が遠く広がっているさま。「磊塊」胸中に積もっている、世情や自分の運命などに対するいきどおり。心のわだかまり。

【訳】

ある人が「鴨川」という名の京都の酒を贈ってくれた

鴨川の緑色の水を誰が釀したのか。遠く都から運ばれ、黄金の杯に注

がれている。この天子のお膝元の豊かな流れを釀して、私の胸中のわだかまりに注ぎ込んでくれる。

44 家王父廿五回忌辰。家翁會客。賦詩

臘醅寒氣薄 臘醅 寒氣薄く
 春燭雨聲多 春燭雨声多し
 金蘭同几席 金蘭几席を同じうし
 桑梓隔山河 桑梓山河を隔つ
 祖風頼無墜 祖風頼いに墜つる無く
 父執亦匪他 父執亦た他に匪ず
 侍飲吾忘倦 侍飲吾倦むを忘る
 其如宵短何 其の宵の短きを如何せん

『山陽詩鈔』卷一所収「丁卯二月先王父彤日侍家翁會諸知旧言志」の初案。『頼山陽全書 詩集』卷四には「丁卯二月一日先王父彤日侍家翁會諸知旧言志」の詩題で収める。文化四年二月一日の作。

【語釈】「家王父」祖父の頼亨翁（諱は惟清）を指す。「王父」は祖父。「忌辰」命日。「家翁」父春水（諱は惟定）を指す。「家翁」は家長。「臘醅」醅はもろみぎけ。にこり

ぎけ臘月（陰曆十二月）に釀す酒。「金蘭」非常に親しい交わり。金のようにかたく、蘭のように香しい交わり。『易経』繫辭上に「二人心を同じうすれば、其の利金を

断つ。同心の言は、其の臭蘭の如し」にあることからいう。「桑梓」郷里。『詩経』小雅・小弁に「維れ桑と梓 必ず止を恭敬す 瞻るとして父に匪ざるは靡く 依るとして母に匪ざるは靡し」による語。昔、中国で垣に桑と梓とを植え、養蚕や器具用として子孫に残したところから、父母の恩愛を敬って故郷を思う意から転じていう。ここでは先祖代々住んでいた竹原の地をいう。「父執」父の友人。執は、志を同じくする者。『礼記』曲礼上に「父の執に見ゆるとき、之れに進めと謂はざれば敢て進まず、問はざれば敢て對へず。此れ孝子の行なり」とあることからいう。「匪他」『詩経』小雅・頍弁の「豈に伊れ異人（祖靈）ならんや。兄弟は他に匪ず」に基づき、兄弟をいう。ここでは兄弟を含めた血縁をいう。

【訳】

祖父の二十五回忌。家長が法要を行った。そこで詩を作った

昨年こぞの冬ふゆに作つくられた酒さけを飲のめば身体からだが温ぬまつて寒さむ気きも薄うらぎ、春はるの夜よに灯あかりりを灯あかりせば雨あめの音ねがおおおしく聞きこえてくる。故郷ふるさととは山河せがれを隔へてながらも、親おやしい交まじわりの者もの同どう士しが同席どうせきしている。集あまつたのは皆父みなちちの知友ちゆうゆうか血縁けつえんの者ものばかりであるから、祖父そふ以来いらいの家風けふうは衰おとろえることはない。旧知きうちの人に相あひあつて酒さけを飲のめば倦うみ疲つかれることを忘れ、春はるの宵よが短みく、あつという間まに時ときが過すぎるのはいかんともしがたい。

45 懐仲父丈人在九州 仲父丈人の九州に在るを懐う

満天風雨一燈檠 満天の風雨 一灯の檠

浙浙瀟々徹曉鳴 浙浙瀟々 曉を徹して鳴る
不識今宵西海路 識らず 今宵 西海路

斯 斯の

誰家窓裏聞茲聲 誰が家の窓の裏に 茲の声を聞くを

『頼山陽全書 詩集』卷四所収「懐仲父丈人在九州」。文化四年の作。頼春風は、この年三月二十一日に竹原を出発して六月二十日に帰郷するまでの間、長崎や博多など各地の名所・旧跡を見物するとともに、多くの学者や文人たちと交友を深めている。旅の詳細は、春風の紀行文「適肥」に詳しい『広島県史 近世資料編VI』所収。

【語釈】 「仲父丈人」山陽の叔父の頼春風（諱は惟彊）のこと。「仲父」は父の弟。「丈人」は老人の尊称。「満天」空いっぱいになる。空一面。「灯檠」ともしびたて。ともしび。燭台。「浙浙」風の音のさま。「瀟々」風雨の激しいさま。

【訳】

九州の旅にいる叔父を思う

外そとは一面風雨いつめんふううが吹ふき荒あれる中なか、灯火とうかをともして部屋へやにいると、ばたばたざあざあと夜よを徹として家いへが鳴なっている。今夜こんや、（叔父しゆうふは）西海道さいかいじの誰たれの家の窓辺まどべでこの音ねを聞きいているのだらうか。

46 題黄山谷図 黄山谷の図に題す

儒冠手蘭蕙 儒冠 蘭蕙を手にし
 可識是姓黃 識るべし 是れ姓は黄なりと
 一下江西種 一たび下す 江西の種
 詩風百世芳 詩風 百世芳し

(朱批) 師詩往々有此病 師の詩、往々にして此の病有り。

『頼山陽全書 詩集』卷四所収「題黄山谷図」。文化四年の作。

【語釈】 「黄山谷」黄庭堅(一〇四五〜一一〇五)。分寧(江西省)の人。字は魯直。号は山谷道人。中国北宋の詩人・書家。師の蘇軾とともに蘇黄と並称される。江西詩派の祖。書は行書・草書にすぐれた。「儒冠」儒者の冠。「蘭蕙」蘭と蕙。蕙はラシ科の多年草で、紫蘭の異名。ともに香草で、賢人君子にたとえる。

【訳】

黄山谷の図に詩を書きつける

儒冠を被り、蘭蕙を手に行っている姿を見れば、黄山谷氏とわかる。彼が江西詩派の基を築くと、その詩風は後々の世まで長く伝えられている。
 (朱批) 師の詩には往々にしてこの欠点が見られる。

47 午庵晩集 午庵の晩集

庭掃生苔氣 庭掃 苔氣生じ
 簾開引月華 簾を開きて月華を引く
 主人新浴罷 主人 新たに浴し罷り
 迎客手瀹茶 客を迎え 手ずから 茶を瀹す

『頼山陽全書 詩集』卷四所収「午庵晩集」。文化四年の作。午庵は太田午庵。30参照。「梅颺日記」を見ると、一月七日条に「夜 甲子楼へ被招御出 久太郎も行」と、二月十七日の条に「夕 甲子楼 久権も行」と、三月三日の条に「夕かた方甲子楼へ御出 久権も行」とあり、そのいずれかの席での作と考えられる。

【語釈】 「庭掃」庭を掃除すること。また、その人。「月華」月の光。「浙浙」風の音のさま。「瀹茶」茶を淹れる。

【訳】

太田午庵による夜の集まり

庭を掃除すれば苔の瑞々しさが増し、簾をおろせば月の光が差ししてくる。主人はちょうど風呂から出てきたところで、客を迎えて手ずから茶を淹れている。

48 問三谷達夫

三谷達夫を問う

川匹練

川匹練

一帯長江明鏡開

一帯の長江 明鏡開き

東西夾水幾樓臺

東西 水を夾む 幾樓台

殘陽東岸紅猶在

殘陽 東岸に紅猶お在りて

西岸已迎新月來

西岸 已に新月を迎え来る

『頼山陽全書 詩集』卷四所収「問三谷達夫」。文化四年の作。三谷達夫は三谷

素平のこと。「梅廳日記」二月二十六日条に「三谷素平へ被招御出 久権同様 詩

会にて夜暎にいたる」とあり、本作はこの日の作であろう。

【語釈】「一帯」ひとすじ。ひとつづき。「長江」『頼山陽全書 詩集』は「長川」に

改める。「明鏡」曇りのない鏡。静かな水面のたとえ。『頼山陽全書 詩集』は「匹練」

に改める。「匹練」は一匹の練絹。また、滝や湖の表面などが練絹の形に似ている

様を形容するという。蘇軾の詩「柳子玉と同一鶴林・招隱に遊び、酔いて帰りに景純

に呈す」に「巖頭の匹練 天を兼ねて淨く、泉底の眞珠 客に濺ぎて忙し」とある。

〔楼台〕高い建物。〔新月〕東の空に上り始めた月。

【訳】

三谷達夫を訪ねる

練絹のように滑らかで

一筋の長い川の水面は曇りのない鏡のように静かで、川を挟んで東西
には幾つもの高樓が建ち並んでいる。東の岸はまだ夕陽で赤く染まって

いるが、西の岸にはすでに月が上り始めている。

49 抱素堂集。分得五言古体蒸韻

抱素堂の集。五言古体蒸の韻を

分ち得たり

光風生微暖

光風 微暖を生じ

江城霞氣蒸

江城 霞氣蒸す

殘梅白閃爍

殘梅 白 閃爍し

細草綠鬢鬢

細草 綠 鬢鬢たり

散策相先後

散策 相先後す

(朱書) 盞着興字

(朱書) 盞ぞ興の字を着けざる。

晴日聊可乘

晴日 聊か乗ずべし

佳期在何處

佳期 何処にか在らん

東郭有良朋

東郭 良朋有り

夙挾公輪技

夙に挾む 公輪の技

雕詞亦鏤氷

雕詞 亦た鏤氷

引客滄老少

客を引きて 老少を滄じえ

醕酒辨淄澠

酒を醕して 淄澠を弁つ

田君耽詩賦

田君 詩賦に耽り

索句如飢鷹

句を索むること 飢鷹の如し

岡川二傲吏

岡川の二傲吏

高吟氣峻嶒

高吟 氣は峻嶒たり

我翁雖病矣

我が翁 病むと雖も

藻思老愈騰 藻思そうし 老おいて愈いよいよ騰あがる

吾才非康樂 吾わが才さい 康樂こうらくに非あず

連也詩滿膺 連れんや 詩し膺むねに満みつ

七人唱且和 七人しちにん 唱となえ且かつ和わせば

厭々坐相仍 厭々えんえん 坐そろに相あい仍いよ

銀燈未剔盡 銀燈ぎんとう 未いまだ剔きり尽つくさず

五鼓已鑿々 五鼓ごこ 已すでに鑿とうとう々

『頼山陽全書 詩集』卷四所収「抱素堂集五言古体分得蒸韻」。これも文化四年

二月二十六日の作。「梅颺日記」二月二十六日条に「三谷素平へ被招御出 久権同

様 詩会にて夜曉にいたる」とあることは48に先述したとおりであるが、同日の「春

水日記」には「夜過素平」とあるだけである。「春水遺稿 詩」(與樂叢書 浅野文

庫 広島市立中央図書館蔵)所収の「抱素堂同賦分得七陽」はこの日の作と考えら

れる。抱素堂は三谷素平の室名。春水が書き残した所によると、この時、抱素堂に

は主人の素平と春水のほかに太田午庵・岡田嘉祐・北川寛とその二児がいたという。

「梅颺日記」には「久権同様」とあり、久太郎(山陽)とともに権次郎(春風の子。山

陽の従弟で、養嗣子となった景讓)も同行していたことがわかるが、春水はそれに

言及していない。春水が記さなかったことも梅颺は書き残している例は多い。

【語釈】「光風」雨後のさわやかな風。「閃爍」光り輝くこと。また、そのさま。「鬢

鬢」髪が乱れるさま。「鏤氷」氷に彫る。無益の労のたとえ。「佳期」よい時期。よい

季節。また、楽しい時。「東郭」町の東。「公輸」春秋、魯の巧匠の名。公輸子、公輸盤、

公輸班と呼ばれる。公輸が木を刻んで造った鶴が、巧身に出来て空を飛んだとい

う故事がある(「公輸子気を削りて鶴飛ぶ」(鏤氷)氷に彫る。無益の労のたとえ。

「弁淄澠」淄水しすいと澠水じょうすいの味を分ける。微妙な味の違いを味わい分けられること。『列

子』仲尼篇に「口將に爽たがわんとする者は、先ず淄澠を弁つ」とある。「岡川」長安の

南郊外(現在の陝西省藍田県を流れる川の名。輞川とも。中国盛唐の詩人王維が

ここに広大な別荘を構え、友人の裴迪と詩を唱和した。「傲吏」世俗の名譽をも

ともしない誇り高い役人。直接は唐の王維と裴迪をいい、同時に広島藩士であつ

た太田午庵と岡田静斎を指すか。「峻嶮」山の高く険しく重なるさま。傑出して

るとえ。「吾翁」父春水を指す。「藻思」詩文を作ること。また、詩文の才能。ある

いは、詩文に盛るべき内容。文思。「康樂」南朝宋、謝靈運の封号。李白の「春夜宴

桃李園序」に「群季の俊秀なるは、皆惠連たり。吾人の詠歌は独り康樂に愧ず」(皆

詩が上手で謝惠連のようであるが、私の詠んだ歌だけは下手で謝靈運に愧じるの

である)とあるのを踏まえたものか。「連」謝惠運を差し、山陽の従弟景讓にたと

える。「厭々」安らかで静かなさま。「相仍」以前のままである。「鑿々」鼓の音。

【訳】

抱素堂の詩会。五言古詩の「蒸」の韻を割り当てられる

雨後のさわやかな風はかすかに暖かく、川のほとりの城は靄がかかつ

たように霞んでいる。散らずに残った白梅に光が差し、小さな草は青々

と茂っている。

まずは晴れた日の気分にかかせてぶらぶらと先後して歩くのがよい。

／(朱書)「乘」の部分はどおして「興」の字を入れないのか。／ 佳い時節は何

処にあるのだろうか。町の東には良き友がいる。

早くから公輸盤こうしゅばんのような技を学んだが、詩を作ることは木ではなく氷

を彫るようなものだ。客を呼んで老いも若きも一緒に漉した酒の良し悪しを語り合っている。田君(岡田君か)は詩賦の創作に耽り、飢えた鷹のように食欲に詩句を求めてくる。岡川荘で詩を詠み合った誇り高き二人の官吏のように、高らかに詩を吟ずると、その気はひとときわ優れて抜きんでている。我が翁は病気ではあるが、その詩情は老いてなお盛んである。私には謝靈運のような才はないが、景讓よ、お前には詩が胸の中に満ちている。ここに集まって七人で詩を唱和していると、心安らかな気分はおのずと昔のままだ。灯火の灯心を切り尽すことなく、気が付くとすでに五更(明け方午前四時前後)を知らせる太鼓が鳴っている。

50 題熊谷蓮生倒騎馬圖

熊谷蓮生の倒に馬に騎る図に題す

半生功業口碑存

半生の功業 口碑存す

一谷西門攀赤幡

一谷の西門 赤幡を攀る

戎服解來穿法服

戎服 解き来りて法服を穿つ

先登極楽正東門

先登の極楽 正に東門

『頼山陽全書 詩集』卷四所収「題熊谷蓮生像」。文化四年の作。

【語釈】「熊谷蓮生」熊谷直実(一一四一〜一二〇八)は、平安末から鎌倉初期の武士。熊谷直貞の子。平治の乱には源義朝方に属したが、乱の後は平知盛に仕えた。治承四年(一一八〇)の石橋山の合戦では平家方の大庭景親に従ったが、間もな

く源頼朝に服した。佐竹氏討伐の戦功により、本領の武蔵国大里郡熊谷郷(現埼玉県熊谷市)の地頭職を安堵された。源義仲や平家との戦いでも活躍し、一の谷合戦(一一八四)では先陣を争い、平敦盛を討ち取った。文治三年(一一八七)流鏑馬の立的役を忌避して所領の一部を没収され、建久三年(一一九二)久下直光との所領争いで不利な裁決が下ると、上洛して法然の門下に入り、蓮生と名乗った。「倒騎馬」浄土がある西方に背を向けぬため、蓮生が京から関東へ下る時、鞍を逆様にはかせ、馬にも逆様に乗った故事(法然上人行状絵図「第二十七」)を指す。「功業」てがら。功績。「口碑」古くからの言い伝え。伝説。口承。「西門」『日本外史』卷一 源氏前記平氏に、一の谷合戦を描いて「この日、直実、暁を冒して西門に向う」とある。「赤幡」赤い旗。平氏の旗印。「戎服」軍服。武装。「穿」衣服を着る。「先登」先陣。一番乗り。「東門」東向きの門。四天王寺の西門からまっすぐ西にたどれば極楽の東門に行き着くと信じられたことから、極楽の東門をいう。

【訳】

熊谷蓮生が逆様に馬に乗る図に詩を書きつける

(熊谷直実が)その半生に為した功績は、伝説として人々に語り継がれてきた。一の谷では西門で平家を討ち、赤い旗を奪い取った。甲冑を脱ぎ捨ててからは僧衣を纏い、先陣を切つて極楽の東門をくぐった。

執 筆 者

吾田 朱里	広島県立歴史博物館草戸千軒町遺跡研究所文化施設事務従事員
川邊あさひ	広島県立歴史博物館頼山陽史跡資料館学芸員
久下 実	徳島文理大学文学部教授
白井比佐雄	広島県立歴史博物館アドバイザー
花本 哲志	広島県立歴史博物館頼山陽史跡資料館主任学芸員
下津間康夫	元広島県立歴史博物館草戸千軒町遺跡研究所学芸員

広島県立歴史博物館 研究紀要 第26号
BULLETIN of the Hiroshima Prefectural Museum of History Vol.26

発 行 日 令和6年12月27日

編集・発行 広島県立歴史博物館

Hiroshima Prefectural Museum of History

〒720-0067 広島県福山市西町2-4-1

2-4-1 Nishi-machi Fukuyama City Hiroshima

720-0067, Japan

Tel. 084-931-2513 Fax. 084-931-2514

印 刷 株式会社中野コロタイプ